

龍 源 寺 報

令 和 5 年 正 月 号

臨濟宗・妙心寺派	住職 松原信樹
佛母寺住職 松原樹	正福寺住職 松原行樹
TEL	3451-1853
FAX	3451-6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com URL: http://www.ryugenji.com

新年におもろ

龍源寺住職 松原信樹

デジタル化の到来により、今起きた出来事が、多くの国々の人々の暮らしに影響を及ぼすようになってきた。人々の関連性が緊密になる一方、どこにも絶対的なものがない、ニヒリズムのようなものが、薄っぺらい自由の謳歌とともに、大手を振っているようにも感じる。自由を謳歌するには、むしろ完全な主体性を確立するほかになく、私たちは、自由の意味をはき違えてはいけない。

もし、私たちが生きている時代が人間のあり方の大きな転換期なのだとしたら、今までも歴史上、多くの転換期があった。それぞれの時代の特有な動向に制約され、その状況の中で、課題や使命を果たすほかにないことも、私たちは理解している。そうとはいえ、人間は、依然として、悲惨な紛争や殺戮を絶やささない。何故だろう。コロナ禍に於いては、世界中の国々が協力していく雰囲気があったが、ロシアのウクライナ侵攻に於いては、いわゆる分断が生じ、宗教者として、最も大切な平和の構築が、大変複雑な状況にあり、難しい問題になっていると実感している。

仏教に於いて、「非暴力」とは、相対する人の心を変え共生の可能性を理解してもらうことである。それは、黙って言いなりになることではなく、あらゆる

手段で暴力を除くように相手の心に訴え、気持ちを変えさせていくことであり、実際に、インド・マウリヤ朝のアショーカ王(紀元前三〇四〜紀元前三二二)によって政治の場で実践された。さらに、二〇世紀においては、マハトマ・ガンディー(一八六九〜一九四八)を通してキング牧師(一九二九〜一九六八)に伝えられ、アフリカ系アメリカ人の公民権運動のよりどころとされた。キング牧師の「暴力に対して暴力をもってむくいる」ということは、なんら効果をもたらず、かえって宇宙のなかの憎しみを強めるにすぎない(『雪山慶正訳「自由へのおおなる歩み」』)という言葉は、「怒みに報いるに怒みを以てしたならば、ついに怒みの息むことがない」という『ダンパダ』の仏典に収載されている言葉と一致する。

ロシアにも、カルムイキア共和国、ブリヤート共和国など仏教徒の多い国がある。仏教の「非暴力」の主張が今ほど重要な意味を持つ時代はなく、今後、社会的変化をもたらす力強いモラルとして、益々重要なものとなっていくだろう。

仏教、とりわけ禅の思想は、いつの時代にあっても、人間のあり方の基本を考え直し、生きる支えとなる根拠をみずからつかみとろうとするところにある。現代のこのような時代だからこそ、人間と世界のあり方を考え、誠実に生きるための心の支えを大切にしたい。

ご寄付

金四十万円也 故石井大二郎殿

金四十万円也 石井京子殿

金三十万円也 匿名殿

金二万円也 富沢正義殿

金一万円也 武内殿

ありがとうございました

※大変貴重なご寄付をありがとうございました。龍源寺の周囲が再開発される中、龍源寺を地域の文化資源の一つとして考え、先代から引き続き、境内整備に力を注いで参りたいと思えます。未熟者ですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

松原信樹

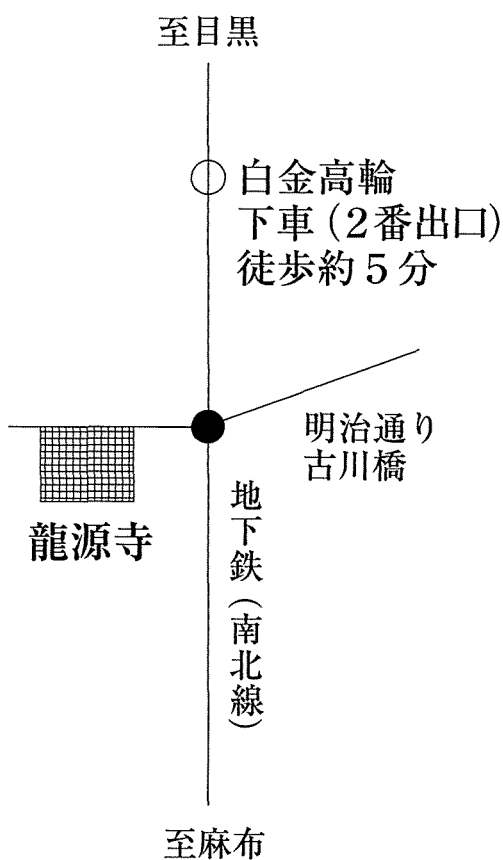
大般若会(新年の祈禱会)

一、一月七日(土曜日) 午前十時

一、法話

・駐車場はありません。

南北線をご利用ください。



荒尾雅也さんを悼む

檀家 北村 行夫

2022年9月22日、龍源寺総代(責任役員)を長く務められた荒尾雅也氏が享年90歳で亡くなられた。

同氏のお寺に対する長年の功績と公私にわたるご厚情に対し、僭越ながら総代の末席に連なる一人として心より感謝とお悔やみのことばを捧げたく、寺報の一隅をお借りすることとした。

荒尾さんは、1932年生9月17日生まれ、戦時下において多感な青春時代を過ごされ立教大学後卒業後「東京通信工業」に入社された。同社は、1946年に日本橋の白木屋の3階の一角を借りて工場兼事務所として創業して10年目を迎えたばかりの新興の会社であった。同社は、異能の技術者井深大、盛田昭夫を創業者とし、後に社名を変えて誰もが知るソニーに成長した。その後の同社のグループ事業が示しているように、その背景にあったのは文化に対する鋭敏な感性と、文化と技術による国民生活の革新であった。

その象徴の一つであるソニービルの地下2階に設けられたソニープラザは、欧米の化粧品、キャラクターグッズ、医薬品などの商品であったが、そこには商品以上の何かが見える店だった。入社して10年経った1966年、荒尾さんはソニープラザの設立とともに代表取締役役に抜擢され1987年に退任されるまでその業に従事された。ソニー製品のショールームを主としていたソニービルの入り口には、時節に合わせたディスプレイが設置され、ビル自体が常に新しい時代を予感させる装置でもあった。それゆえそこは、荒尾さんが全人格を投入するにふさわしい場所でもあったといえるだろう。

また私生活における荒尾さんは、先年亡くなられた奥様とともに、春日部にある社会福祉法人「子供の町」の熱心な支援者であり、同時に世界スカウト財団の理事、公益財団ボーイスカウト日本連盟の事務局長、理事なども務められ、つい最近まで世界を飛び回っておられた。特に前者は、戦後上野駅周辺に浮浪児と呼ばれる子供達が溢れていた時期にその救済を目的として始まった活動で、今も複雑な問題を抱える子供の救済に地道に立派な成果を上げている人権団体である。

言うまでもなく荒尾さんが、お寺に対して行われた有形無形の貢献は計り知れない。責任役員会での、時に厳しく、時に配慮に満ちた会社経営の経験にもとづく多くの助言は、一々挙げる事が出来ないが今もお寺に活かしている。特にお寺の財政的な将来設計についてお寺の伝統と先見性を両立させるためにどうすべきかに常に心を砕いておられた。荒尾さんは健啖家でもあったので、住職や私をしばしば食事に誘い、その機会にご指導いただくことも少なくなかったが、二人とも一番年配の荒尾さんの並外れた食欲には勝てなかった。そう言えば10年ほど間だったろうか、「この歳になると、あと何回夕食が食べられるかと考えると、1回でもおろそかな食事は出来ない。」と真顔でおっしゃったことがあったのを思い出した。京都へ一緒したときなどは、夕食に鳥雑炊、朝食朝がゆ、お昼をうどんすきという食べ歩きをしたことがあり、その組み合わせも驚かされた。亡くなられる数週間前に病院から「90歳の誕生日パーティーをやらうと思うが」とお電話をいただいた。私は、氏がここ数年体調を崩し入院を繰り返しておられたことを知っていたので一瞬答えに窮

(前ページより)

した。すると「でも顰蹙を買いますな」と声を上げて笑われた。これが最後にお聞きした、いつもの荒尾さんらしいジョークだった。

そのすぐ後に荒尾さんから「感謝〜みなさまのおかげで〜」と題する小冊子が9月16日付けで送られてきた。90歳の誕生日を迎えるその日に届くように前々から用意されていたものと思われる。添えられたメッセージにはこうあった。

「卒寿を迎えて、お世話になりました皆様には言葉で尽くせない思いが心に溢れてまいります。来し方を思いますと、仲間となつてくださった方々に何と恵まれたことでしょうか。ひとえに皆様のおかげと感謝致しております。」そして「師匠に恵まれた」と、学生時代から今日までに出会った13名の方のお名前が列挙されており、そこには「第16代松原泰道和尚と第17代松原哲明和尚」のお二人が明記され、感謝の言葉は、「亡妻嘉子とともに」と結ばれていた。

ダンディで、ユーモアと奉仕と感謝の精神に溢れ、かつ用意周到な方であった。

心より荒尾さんに感謝申し上げます。心より、ご冥福をお祈り致します。



柳 緑

花 紅

明けましておめでとうござい
ます。本年もよろしくお願
い申し上げます。▼総代の故荒
尾雅也さんの追悼文を、総代
の北村行夫さんより寄稿をい
ただきました。大変ありがたく、荒尾さ
んの靈前に捧げたいと思います。▼境内
に隣接する納骨堂の建立計画を進めてお
ります。お檀家さまであり、龍源寺玄関
のリフォームで大変お世話になりました
建築家の山本哲也さんにご尽力いただい
ております。山本さんも自分事のように
親身に設計をしてくださっていますので、
大変ありがたく思っております。お寺な
のになぜ簡単に納骨堂ができないかとい
うと、龍源寺では、明治以後墓地がな
かったということ、保健所の申請に時
間がかかっているためです。当初の計画
より遅れています。確実に進めていま
す。▼哲明和尚の十三回忌の法要を十二
月一日の開山忌に、近隣のご住職とも
に営みました。▼私の母方の祖母が十月
十五日に百六歳で亡くなりました。祖母
の晩年の十年は、北鎌倉の雲頂庵から龍
源寺に移り、母親とともに過ごしていま

した。ちょうど時を同じくして、私は家
内と縁があり、結婚をし、娘である瑞樹
が生まれ、五人での生活が始まりました。
祖母と瑞樹の年齢差はちょうど百歳にな
ります。二二、三歳で実家を離れ父と結
婚をした母にとって、この十年間はきつ
と貴重な時間であったに違いありません。
母にとっても実母と孫に囲まれた生活は
豊かな時間であったに違いなかったと思
います。家内の亜矢も元気にしておりま
す。先日、航空性の中耳炎を患い療養を
していましたが、今では元気に仕事に復
帰致しました。龍源寺の仕事、会社の仕
事、そして家庭のことで毎日忙しくして
おります。娘の瑞樹は、四月から白金の
三光坂にある小学校に通うことを予定し
ております。▼令和五年一月七日(土)
午前十時より、新年の祈祷会である大般
若会を厳修致します。引き続き、堂内で
のマスクの着用、サーモグラフィでの検
温、手指の消毒、外階段を使つての外か
らの御焼香、もちろん、御来山いただか
なくても、ご連絡いただければ御回向さ
せていただきます。寺族一同お待ち申し
上げます。

(松原信樹)